

マーケット概況（2024年1月）

1月の債券相場は、10年372回債が0.625%で取引を開始後、1日の能登半島地震を受けた早期の金融政策正常化観測の後退から買いが優勢となった。また、減額観測のあった9日の日銀買入オペが全ゾーン買入額据え置きとなると利回り低下が進んだ。10日の10年債入札や12日の30年債入札が低調な結果となり一時売られる場面もあったが、日経平均株価の1990年以来の高値更新などに伴うリバランスの買いも入り堅調に推移した。15日の日銀買入オペの結果が強い内容となると、10年373回債の利回りは0.550%まで低下した。しかし、米国FRB高官の早期利下げに対する慎重な発言を受け米国債が売られると反落し、18日の20年債入札の低調な結果も加わり債券相場は下げ幅を拡大した。さらに、23日の日銀金融政策決定会合では金融緩和策の維持が決定されたものの、植田総裁の記者会見において近い将来の政策正常化が示唆されると利回りは急上昇した。25日の40年債入札が低調な結果となると、10年373回債の利回りは0.750%まで上昇した。26日発表の1月東京都区部CPIが市場予想を下回ると一時買い戻されたが、1月決定会合における「主な意見」の中で早期の政策正常化に向け前向きな意見が複数示されたことが明らかになると月末は再び軟調となり、結局10年373回債は0.730%で取引を終えた。

<短国市場>

年明けは足元金利が-0.10%程度で安定推移し、担保玉確保の動きも弱まったことから月初の3M入札では最高落札利回り-0.16%台と前月比で約3.0bp上昇した。その後、ロールニーズの強さから3M1206回債入札では-0.1944%まで低下した。在庫余剰感から次第に売り優勢となり、24日の国庫短期証券買入オペも軟調な結果となると、26日の3M1209回債入札では-0.14%台まで上昇し、一時は-0.170%まで低下したが最終的に-0.150%で取引を終えた。6M1205回債入札は、投資家の玉確保姿勢が先行し最高落札利回り-0.1583%と好調な結果だった。1Y1207回債入札は、早期のマイナス金利解除見通し後退により、最高落札利回り-0.0461%と好調な結果となり、一時-0.075%まで買われるも月末には-0.04%台まで売られた。

<一般債市場>

1月の定例地方債は、10年債・5年債のスプレッドはいずれも前月から横ばいとなり、4ヵ月連続の国債カーブ対比+9.0bp、+10.0bpで条件決定された。日銀の政策変更観測が後退していたことや発行額自体の少なさから順調に消化された。また、政策変更時期後ズレへの思惑により年度内残高積増し需要等から既発債も含めスプレッドのタイトニングが進行した。SDGs債関連では、札幌市が同市初のサステナビリティボンドを発行したほか、商船三井が海運業界で世界初となるブルーボンドを起債した。社債発行額は25銘柄、7,130億円と前年同月（20銘柄、4,760億円）からは増加したが、前月（70銘柄、10,690億円）からは大幅減少となった。

◎ 主要債券月間四本値

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#373	0.590(10日)	0.550(15日)	0.750(25日)	0.730(31日)
#372	0.625(4日)	0.520(15日)	0.720(25日)	0.695(31日)
#362	0.385(4日)	0.300(15日)	0.485(25日)	0.450(31日)
#163-#164(5Y)	0.220(4日)	0.155(15日)	0.330(25日)	0.305(31日)
#186-#187(20Y)	1.390(4日)	1.265(15日)	1.560(25日)	1.535(31日)
#1199-#1205 TDB(6M)	—	—	—	—
#1203-#1209 TDB(3M)	-0.210(12日)	-0.225(12日)	-0.140(31日)	-0.150(31日)